名桜大学総合研究，(28)：1-13（2019）

原著論文

エリザベス・ラムと中国の英語俳句（1985-1993）

菅野　敦志*

Elizabeth Lamb and English Haiku in China（1985-1993）

Atsushi SUGANO*

要　旨

本研究は，エリザベス・サール・ラムが中国における英語俳句の紹介に果たした役割について，主に中国人読者との交流に焦点を当てて明らかにするものである。一般的に，文化交流研究は二国間の関係が中心であり，俳句も日中文化交流研究にとって一つの重要な検討対象となる。しかしながら，1980年代以降の中国において，それは日本文化としての受容に限られるものではなく，むしろ，米国人によって詠まれる英語俳句＝「ハイク」という形態をとり，民間レベルでの交流を進展させていた過程が見受けられたのであった。

中国におけるハイクの紹介は，ラムが1985年７月に中国の雑誌『英語世界』に寄稿した，北米でのハイクの広がりを紹介する文章が嚆矢であった。その後，ラムは40数名もの中国人読者から手紙を受け取ることとなる。多くは数回のやり取りで途絶えたが，なかには龔海平のように，長年の交流の末にラムのハイクを翻訳して刊行するなど，確実に交流の成果を残す者も現れることとなった。

最初のラムの文章から８年後，龔海平が中国語に翻訳して1993年に刊行された彼女の句集は，1979年の米中国交樹立後の民間交流の一つの小さな成果と呼べるものであった。それは同時に，戦後東西文化交流のなかの多文化間関係の一事例でもあったといえよう。

キーワード：エリザベス・サール・ラム，英語俳句，米中文化交流

Abstract

This paper focuses on and reveals the role which a prominent American poet Elizabeth Serle Lamb played in introducing English Haiku in China since the mid-1980s. In July 1985, Lamb introduced the history and progress of Haiku in North America in her article in the *World of English* magazine published in China. It is said to be the first article to introduce English Haiku in China after World War II, and Lamb received letters from more than forty Chinese readers who read her article. Many of them lost contact with Lamb after a short correspondence; however, a few readers became sincere friends with her, exchanging letters for many years. Some of them, like Gong Hai-ping, even translated and published her English Haiku in China.

Lamb's book of English Haiku, *The Light of Elizabeth Lamb*, was translated into Chinese by Gong Hai-ping in 1993, eight years after Lamb had published her introductory article on English Haiku in North America in 1985. That certainly were one of the major achievements of intercultural and grass-roots cultural exchanges after the normalization of U.S.-China relations in 1979.

Keywords: Elizabeth Serle Lamb, English Haiku, US-China Cultural Exchanges

* 名桜大学国際学群　〒905-8585　沖縄県名護市字為又1220-1　Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1, Biima-ta, Nago, Okinawa 905-8585, Japan

はじめに

本研究は，エリザベス・サール・ラム（Elizabeth Searle Lamb，1917年生まれ，2005年没）[1]が中国における英語俳句の紹介に果たした役割について，主に中国人読者との交流に焦点を当てながら，1980年代中期から中国において確認可能であった民間レベルでの英語「ハイク」（Haiku，以下英語俳句をハイクと称する）による東西文化交流の一断章を明らかにするものである。

中国国家図書館の蔵書検索によれば，戦後に刊行された単著で俳句に関する最も古い文献は1983年の出版である（松尾芭蕉他（林林訳）『日本古典俳句選』長沙：湖南人民出版社，1983年。彭恩華『日本俳句史』上海：学林出版社，1983年）。その蔵書には，わずかではあるが外国人による俳句の翻訳書，とりわけハイクに関するものもわずかながら含まれる[2]。だがいずれも，それらは1980年代以降になって出版された書籍である。

日本は1972年に中華人民共和国と国交正常化を果たしたが，当然のことながら，その後の両国の文化交流，特に文芸交流への着目は，「日本における中国文化の受容」もしくは「中国における日本文化の受容」という，日中二国間にのみ焦点が当てられてきた。

中国における俳句の受容については，日本語から中国語に翻訳された形式での，「日本文化としての俳句」の紹介や，漢語で俳句の五・七・五を詠む「漢俳」（1980年が創作の起源とされる）[3]の創出などがある。1980年が漢俳の創作起源である点には，1972年の国交正常化以降という日中の国際関係だけでなく，1977年の文化大革命の収束という中国国内の政治的要因が両国間の文化交流に及ぼした影響があったと考えられるが，やはりこれらも1980年代に生じた変化であった。

そもそも，俳句の「国際化」[4]というテーマを考えた場合，1989年に国際俳句交流協会が創設されたことに示されているように，1980年代にはすでに日本語以外の言語による俳句創作がかなりの程度において世界的な広がりをみせていた。当然ながら，中国の場合には母語による創作として漢俳への注目が一般的である。だが，一方で，1972年の国交樹立から10年を経て，1980年代以降の中国で立ち現れることとなった俳句は，日本語の／日本文化としての俳句や漢俳の紹介にとどまるものではなかった。そこには，あまり知られていないが，英語の詩の一形態と認識されるハイクという姿をとって米中国交正常化後の中国で紹介された動きがあったのである。

そのような中国におけるハイクの紹介は，規模と影響の大きさでみればきわめて限定的ではあった。とはいえ，たとえ小規模であっても，民間レベルでの文化交流を進展させた一事例に焦点を当てて検討し，その意義を確認する必要はあるだろう。そうした必要性に鑑みて，本稿ではこの1980年代中国で生じたハイク導入の事例紹介から，戦後東西文化交流のなかの多文化間関係の一断面について検証してみたい。

なお，主要な史料として，アメリカ俳句協会（The Haiku Association of America）寄贈によるカリフォルニア州立図書館（California State Library，以下CSLと略称）所蔵の「アメリカン・ハイク・アーカイブス」（American Haiku Archives，以下AHAと略称）を用いる[5]。また，本稿の日本語による訳文はすべて筆者によるものである。

Ⅰ．エリザベス・ラムによる『英語世界』誌上でのハイク紹介（1985年）

1972年に日中は国交正常化を果たし，国家レベルでの関係修復は実現したものの，中国の民衆レベルでいえば日本はいまだ禍根を残す存在であった。他方，抗日戦争の勝利に貢献したアメリカは，中国人民の眼には憧憬の対象として映る超大国でありながらも，中国がソ連との蜜月関係の下にあった冷戦期にはアメリカ帝国主義として糾弾されるにいたった。しかしながら，中ソ関係が悪化し，1966年から10年間続いた文化大革命が1977年に終息すると，米中は1979年に国交回復を実現させることとなった。

そのような状況下にあった1980年代初頭，国家の文化交流としてではなく，著者対読者の交流という，草の根文化交流の一形態としての民間ハイク交流の先駆者となった人物が，エリザベス・ラムであった。

ラムはアメリカの詩人／俳人で，1963年頃から俳句の創作を始め，アメリカ俳句協会（後に詳述）では初期の会長も務めた。アメリカで発行される俳句雑誌のなかでも，アメリカ俳句協会による機関誌『フロッグポンド』（*Frogpond*：蛙池）は北米を代表する句誌として知られるが[6]，ラムは創刊号から７年間，一貫して同誌の編集長として活躍し，日本側からもきわめて高い評価を受けていた[7]。

アメリカの俳人を代表するラムであったが，その彼女が初めて中国にハイクを紹介する人物となったのは当然の成り行きであったといえよう。ラムは知人の依頼を受けて，北米におけるハイクの広がりを紹介する文章「北米に咲き誇る俳句」を執筆し，それが1985年７月に北京の商務印書館が刊行する英語学習者向け雑誌『英語世界』に掲載された[8]。ラムによる文章は，中華人民共和国成立後に初めてハイクを紹介した文章とされるが，同文章は史料的価値も高いため，以下に概要を記しておく。

ラムによる「北米に咲き誇る俳句」では，「今世紀初めに日本から導入された短詩である俳句」[9]がアメリカとカナダに「しっかりと根づき，たくましく育っている」

こと，特に俳句協会が「俳人が相互につながるうえで重要な役割を果たしている」として，北米における俳句導入の歴史を簡潔に紹介するものであった。

ラムの説明によれば，ハイクの本格的な始動は，第二次世界大戦後の連合軍による日本占領によって，禅仏教を含む「日本的なもの」への関心が急激に高まった1950年代のことであった。R.H.ブライスやハロルド・G・ヘンダーソンによって築かれていた基礎の上に，ビート族が新たな試みを行い，アレン・ギンズバーグ，ゲイリー・スナイダー，ジャック・ケルアックなどが俳句を用いた“実験”に挑戦して成功を収めた[10]。

続いてラムは，1960年代初期に形成されていった北米における「ハイク・ムーブメント」に言及していた。ラムのいうこのムーブメントは，1963年発刊の小雑誌『アメリカン・ハイク』（*American Haiku*）[11]に始まるもので，1967年にはカナダにおいても最初の俳句雑誌が現れることとなったという[12]。その他にも小雑誌が刊行されては消えていったが，多くの俳人は自身の作品を小冊子（chapbooks）にして刊行していった。

このムーブメントで重要だったのは，1968年冬から1969年にかけてアメリカ俳句協会（Haiku Society of America）[13]がニューヨークで創設されたことであった。ハイクの最初のオリジナルなアンソロジーも出版され[14]，古典から現代俳句まで，日本のあらゆる俳句が新たな翻文で紹介されるようになり，日本の俳句の優れた批評も数多く現れるようになった。そうした成果として現れた中心的な俳句雑誌として，『モダン・ハイク』，『ドラゴンフライ』，『ウィンド・チャイムズ』，『フロッグポンド』などがあった[15]。

上述のような説明を行ったうえで，ラムは今にちにおける英語による俳句について，すでに多様な形式と「十分に確立した基盤を有し」[16]ており，多様な形態の俳句書籍が多数出版され，学童も俳句を学んでいること，北米の俳人たちも継続して「わずかな語句で表現される一瞬の研ぎすまされた知覚が，感受性豊かな読者の心に反響し続ける，俳句のエッセンスを味わう術を学び続けている」ことを指摘していた。続いて，ウィリアム・J・ヒギンソンの『俳句ハンドブック』（*The Haiku Handbook*）の刊行が近いことを述べたうえで，「現代の北米詩人による代表的な俳句」を数句紹介して文章を閉じていた[17]。

風鈴
　柳の木の
　　黄色の葉
the wind chimes
　the yellow leaves
　　of the willow
　　ジェリー・キルブライド
　　『ヒートンファーム俳句』ウィンドチャイムズ出版社，1983年

空だった卵パックケースに満たす雪
Empty egg carton fills with snow
　　ジョージ・スゥエード
　　『フローズン・ブレス』
　　ウィンド・チャイムズ・プレス，1983年

喧嘩の後
　柿の
　　後味
after the quarrel
　aftertaste
　　of persimmons
　　ジェラルディン・C・リトル
　　『フロッグポンド』第７巻第２号，1984年

ラムは，同文の文末に，「俳句協会，俳句雑誌，もしくは西側諸国における俳句に関する質問は，著者に問い合わせることができる」として，自身のニューメキシコ州サンタフェの自宅住所を記載していた。この後，この住所が中国人読者との接点となり，ラムは中国初のハイク導入の立役者となっていくのであった。

Ⅱ．中国人読者からの反響――ラムの喜びと戸惑い

上述のように，『英語世界』に掲載されたラムの文章には自宅住所が記されていたため，その後，彼女の元には中国の読者から続々と手紙が届くこととなった。その数は，３カ月後の1985年10月末日にはすでに20通を数えていた。

この状況について，彼女は同じ俳句仲間であるジェリー・キルブライド（Jerry Kilbride）にあてた手紙のなかで次のように伝えていた。（下線はラムによる）

手紙はまだ中国から届き続けていて…土曜日に２通，今日も１通…今のところ20通になります。でも，まだ最初の４通にしか返信ができていません。この対応がすごく難しいと感じるのは，彼らがあまりにも「俳句とは何か」を知らなさすぎるからなのです。私自身，まさか中国人が日本の俳句をこれほどまでに<u>知らない</u>とは想像していませんでした。そのため，文章では俳句の基礎知識についてほとんど言及していなかったのです[18]。

そもそも，掲載された文章は，キルブライドの友人から紹介された中国人の人物に，北京在住で『英語世界』を出版する商務印書館に勤める叔父がいたことから，そうした個人的な依頼を受けて実現したものであった[19]。

ラムは，彼女の元に届いたこれらの手紙に綴られていた中国人読者の「俳句について知りたい」という要望に応えるべく，献身的に俳句雑誌を郵送するなどしていた。だが一方で，連日のように届く手紙に対しては，疲労の色も隠せなかった。キルブライドを始め，俳句仲間にも返信を手助けしてもらっていた彼女であったが，やはり彼らにも，中国人読者の「英語が思いのほか上手なことに驚く反面，俳句の知識をほとんど持ち合わせていない」ことを繰り返し伝えるのであった[20]。

とはいえ，中国という，ハイク“新大陸”との接点を持ち，ハイクを介したつながりを中国人読者との間に得ることができたその喜びについて，ラムは複数の中国人読者にあてた手紙のなかでその思いを次のように伝えていた。

> あなたの国と私の国の作家，詩人，教師との間になんらかの結びつきができていると感じられることは素晴らしいことですね。私たちは一つの美しい緑色の地球の上に生きていて，お互いのことをよりよく理解することを学ばなければいけないと強く思います[21]。

また，中国人読者のなかには，後述の董継平のように，アメリカ俳句協会に入会して自身が創作した俳句を投稿した者もいた。それについてラムは，「俳句協会に中国人の会員を迎え入れられることはなかなか素晴らしいことだと私は思う」とし，同様に新たな出会いに対する歓喜を友人に伝えていた[22]。しかしながら，遠い東洋の友人たちにハイクに関連して説明が必要となるアメリカ文化を伝える喜びを感じる一方で —— 先進国側の人間としての責任感や使命感もあったかもしれないが —— 現実としては少なくない金銭的負担も負わなければならなかった。「現実的な問題は郵送代」[23]という言葉にも表れていたように，あらゆるハイク関連の資料の送付を無償で求める，そうした中国人読者の屈託ない要求に応えようとするラムにとって，発展途上国としての中国と，先進国としてのアメリカとの間の関係性は決して平等なものではなかった。

最終的に，ラムの元に届いた中国人読者からの封書は44通に上った。その多くは短かいやり取りで途切れているものの，なかには交流が数年にも及んだ者もいた。そのなかには，わずかではあるが，より高度な学びを深めるためにアメリカやイギリスなど国外の高等教育機関に進学した者もいれば，1989年６月に発生した天安門事件の衝撃を受けて，オーストラリアなどの先進国へ脱出した学生もいた。紙幅の都合から，本稿ではラムと中国人読者全員のやり取りを紹介することはできないが，彼ら／彼女たちのなかでも —— ラムと一度も顔を合わせる機会に恵まれなかったにもかかわらず —— 文通を通じてラムと交流を続けた４人の主要な人物（陳遠岭，董継平，蔡暁明，龔海平）を紹介してみたい。

Ⅲ．精神科医・陳遠岭—渡米留学への強い憧れ

陳遠岭は江蘇省鎮江市に在住し，精神病院に勤務する精神科医であった。彼が初めてラムに手紙を書いたのは1985年９月20日であった。その手紙で陳は，自身が若い精神科医であること，詩に強い興味を持ち，これまで数多くの西洋の詩を鑑賞してきたが，俳句というジャンルに無知であったこと，ラムの文章が「中国で始めてこのテーマについて扱った文章」であること，俳句に関する知識を教示してほしいことなどを伝えていた[24]。

陳が創作した数々のハイクのなかでも，最初にラムが選評したのは以下の句であった。

年老いた男
　冷たい川—雪で
　　魚釣り
An old man
　In the cold river-snow
　　Fishing

ラムは，この句が最も「この瞬間，この場所で何が起こっているか」を示す句であるとし，高く評価していた。ただ，「river-snow」の表現が英語的でないことから，語の順番を反転させた以下の句を提案したのだった[25]。

年老いた男
　冷たい川で魚釣り——
　　雪降り
An old man
　Fishing in the cold river--
　　Snowing

文通開始から２年後の1987年12月５日付けの手紙では，次のようなやり取りがあった。陳遠岭は幼少から「シェークスピアやヘミングウェイを読みながら，この停滞した村から遠く離れた場所を夢見続けていた」とラムに伝え，そのうえで，彼女に対して北米行きの夢と希望を語り，経済面での保証人になってほしいと訴えたのであった[26]。だが，ラムの返答は彼の期待と反したものであった。

あなたがアメリカで心理学と精神医学を深く学びたいという気持ちはよくわかります。ですが残念ながら，夫も私もその分野のつながりがなく，奨学金などについても知り得ません。他の中国の詩人たちからも同じような件で助けを求めてられてきましたが，現在にいたるまで私では力になることができていません。もしアメリカでの大学院進学について情報を提供してくれるセンターや機関を見つけることができたら，もちろんあなたに連絡します[27]。

その３年後，1990年２月９日付けの手紙で陳遠岭は，同年夏にカナダで開催予定の統合失調症に関する国際会議の招待を受けたものの，「低い給与の中国人精神科医にとって，バンクーバーはあまりに遠く，旅費の支援が可能かどうか，あちこちで聞いている」と書き送っていた[28]。だが，翌年1991年２月11日付けの手紙で，彼はラムに対して，娘の誕生を伝えると同時に，同会議には「地方の調査研究のため参加できなかった」と報告していた[29]。

その３カ月後の５月にラムは陳遠岭から一通の手紙を受け取る。その手紙には，ニューメキシコの大学院の入学許可が下りたことを「喜びをもって報告」するとともに，ラムに対して「もし，あなたを経済的な保証人とすることへの了解が得られるのならとても嬉しく思う」と書き綴り，米国留学の支援を再度要請するのであった[30]。

この再度の要請に対して，ラムはただちに返信し，以前と状況は変わらず，「夫は80歳近く，私も75歳になるところ」であり，「限られた収入のなかでの生活」を送っていることから，やはり陳の手助けは困難であることを伝えた[31]。これがラムから陳に送った最後の手紙となった。

このような事例は陳に限ったことではなく，例えば，広東省広州市に居住し，某科学技術関連会社に勤める豊憶東も同様であった。当初はハイクに対する興味関心を伝える手紙から文通を開始したものの，その後自社企業のセールスを持ちかけるなど，自身の経済的利益に結びつけようとする意図が明らかとなり，その時点でラムは彼への返信を止めていた。

陳や豊のような人物からの手紙は少なくなかった。このことは，先進国としてのアメリカとその対極にある中国との間にあって対等な関係性を築くことの難しさをラムに強く認識させたのではなかろうか。

Ⅳ．ホテルマン・董継平――“詩人”としての自負と欲望

董継平は重慶市を代表するホテル・人民賓館でフロント業務に携わる若いホテルマンであった。董は，1985年８月13日付けで最初の手紙をラムに書き送っていた[32]。その手紙のなかで，彼は自身を「17歳から詩を創作し始め」，「いかなる詩も好むが，特にイマジニスト」に関心が強い「パートタイムの詩人」であると自称していた。さらに，将来外国語の詩を中国語に翻訳することを心に決めていることから，英語を熱心に勉強しているのだとラムに伝えていた。

董継平はその最初の手紙のなかで，中国の漢詩（絶句）が俳句に与えた影響をラムに指摘していた。ラムは1985年10月10日付けで董に対して最初の返信をするが，そこで彼女は，「日本の詩に対する中国の影響は知っていた」ものの，どれほど直接的な影響を受けていたのかについては知らないため，非常に興味があると述べていた。また，前回の手紙で董が詠んだハイクが「非常に詩的」で「美しい思想を含んでいる」として，それらを受け取ったことを「とてもとても嬉しい」とその喜びを伝え，自身の句集および『フロッグポンド』を董に送っていた[33]。

非母語の初学者としてラムに教えを請う，そうした受け身の姿勢が感じられる他の中国人読者とは対照的に，董継平の詩人としての態度は真剣そのものであった。彼はアメリカ俳句協会に加入したい旨をラムに伝え，中国人読者としてはいち早くメンバーとなった。1983年に学林出版社から刊行された彭恩華の『日本俳句史』の概要を英訳してラムに提供していたように[34]，ラムの前で彼は受動的な学習者ではなく，むしろ主体的で対等な立場から有益な情報を共有しようとする，異国に居住する心強い仲間の一人であるかのようであった。流暢な英語を用いて，同じ「詩人」としての目線で観察し，ハイク論議の材料を提供してくれる董継平の文章とその姿勢に，ラムは強く惹かれていたように思われる。

董継平は自身が詠んだ数多くのハイクをラムに送っていた。そうした熱意に応えるように，ラムは董による以下の一句を選定し，『フロッグポンド』に掲載していた[35]。

大晦日
　キャンドルライトが揺れている
　　皆の顔に
new year’s eve
　candlelight moving
　　on every face

ラムから同雑誌のコピーを送付された董は，自身のハイクが『フロッグポンド』に掲載されたことについて感謝と喜びをラムに書き綴っていた[36]。

ただし，熱意溢れる青年であるがために――だからこそ――ラムが対応しきれないある種の勢いも董継平は見せていた。例えば，ラムは中国人読者のなかでも，特に真剣かつ熱心にハイクを創作しようとしている者同

士を紹介し合い，相互の交流を促そうとしていたが，董継平は，1986年５月の段階において，ラムが築いたこうしたネットワークを用いて「中国でハイク協会を創設したい」という希望を次のようにラムに伝えていた。

ここであなたに中国から伝えたいことがあります。私たちの元には，中国でハイクを創作することに興味を持つ者が集い，それぞれ手紙をやり取りし合っています。そうしたなか，私たちは「ハイク・グループ」を作り，もし時宜を得て条件が整ったならば，中国のハイク協会の創設を考えています。特に英語を学ぶ学生を中心として，私たちはより多くの人々の関心を集めることでしょう[37]。

続けて董継平は，ハイク・グループの創設から中国におけるハイク協会の創設へと拡大展開させるそうした一連の“ムーブメント”[38]を盛り上げる目的において，アメリカで刊行された書籍『300 English Haiku in North America』（『英語俳句300句』）を中国語に翻訳して出版したい旨をラムに告げていたのであった。

勇んで翻訳計画をラムに告げた董継平であったが，その後の返信のなかで，翻訳した作品は個人で鑑賞する分には問題はないが，訳書の出版となると著作権の問題が生じることから，簡単には刊行できない旨をラムに指摘されることとなる[39]。その後，董継平は「指摘を受けて出版計画を断念した」旨をラムへの返信のなかで彼女に伝えたのであった[40]。

その１年後である1987年，董継平はある著名な中国の詩人雑誌に北米のハイクに関する紹介記事の執筆を依頼され，それを承諾したこと，そして，同記事に掲載するために北米俳句協会のメンバー全員が入っている写真の提供をラムに依頼していた[41]。また，董は別便の手紙のなかで，中国の有名な伝統技術である微細彫刻を得意とする芸術家の友人がおり，彼に依頼すれば好きな俳句を木片に彫り込むことができるとし，周囲の者に興味がないかどうかをラムにたずねていた[42]。

そうした董継平の依頼に対して，ラムは彼にあてた1988年２月11日付けの手紙で，写真が手元に見当たないこと，もし見つけた場合はその時に送ることを伝えていた[43]。同時に，その宣伝依頼ともセールスともとれるような微細彫刻に関する問い合わせに対しては，それにかかる費用，送金方法や商品の送付方法も情報不足でよくわからないとして丁重に断っていた。

文通を開始してから，ラムは董継平に対して何冊ものハイク雑誌を彼女自身の負担で送付し続けるなど，多くの便宜を図ってきた。しかしながら，北米ハイクに関する記事の執筆を，当事者のラムではなく，門外漢であった董がラムの存在を差し置いて執筆しようとしたという点は，“詩人”としての外部からの注目を渇望する，彼が胸に秘めていた欲望の裏返しであったようにも見える。ラムの立場にしてみれば，彼女への記事執筆要請（および董による中国語訳）ではなく，単に情報提供のみを求めてきた，そのような董からの依頼はあまり快く思えなかったかもしれない。ラムと董継平とのやり取りは，その手紙を最後に途絶えている。

Ⅴ．大学院生・蔡暁明――ラムによるハイクの最初の翻訳者

上海の復旦大学でアメリカ文学を研究する大学院生である蔡暁明が最初の手紙をラムにしたためたのは，1985年８月10日のことであった。彼は，比較文学を研究する一学徒としてラムの文章から大きな刺激を受けたこと，とはいえ研究資源の著しい欠如から，関連資料の提供を要望することを述べていた[44]。その蔡の要望に対して，ラムは10月19日付けの返信で，手紙に対するお礼とともに，蔡の研究に役立つよう，最近出版されたヒギンソンの『俳句ハンドブック』と彼女が編集する『フロッグポンド』をプレゼントとして航空便で郵送することを約束した[45]。

蔡暁明が２通目の手紙をラムに送ったのは1986年に入ってからのことであった。蔡は，ラムからの小包の到着を待っての返信を考えていたものの，いつまで待っても届くことがなかったこと，しかしながら，ラムからのカードを受け取り，小包が紛失したことの確信をようやく得て返信する決心がついたことを述べていた[46]。

最初の手紙で蔡暁明は自身を復旦大学でアメリカ文学を専攻する学生であることしか述べていなかったが，その２通目の手紙では詳細な自己紹介をしていた。彼は復旦大学の大学院修士課程に在籍する32歳の学生であり，28歳の妻と１歳になる息子を持つ父親であった。彼の専攻はアメリカ文学であったが，特にアメリカと中国の詩の比較を研究テーマとしていた。

ラムは蔡に対する返信のなかで，彼の手紙を受け取ったのがようやく４月23日であったこと，関連書籍を入れた小包が不達となっていることを知り大変残念としながら，蔡に対して優しさにあふれる態度で接していた[47]。結局，蔡は不達となっていた小包を大学の郵便局員に懇願して探し当ててもらい，無事受け取ることができたのであったが，『俳句ハンドブック』を始めとする最新の書籍と雑誌を手にした彼は，ラムに対して心からの感謝の念を書き綴ったのであった。

このようにして蔡暁明とラムの文通は始まった。蔡自身はハイクをラムに送ることは一度もなかったものの，この蔡が戦後中国において初めてハイクを翻訳して中国に紹介する人物となる。蔡暁明は，1986年12月13日付け

のラムへの手紙のなかで，ある新聞にアメリカのフェミニストに関する批評やアメリカにおける性文化に関して蔡が執筆した文章が好評を博したことから，編集者から別の記事の執筆を依頼されたとし，そのため「昨夜あなたのハイクを訳して，アメリカのハイクに関する短い記事を執筆した」こと，ラムが贈ってくれた書籍が「本当に大きな助けになった」ことを伝えていた[48]。

その蔡暁明の文章は，1987年２月に刊行された雑誌『上海文芸』誌上で，「英語俳句」（原題同じ）と題して掲載された。ラムが残したメモ書きによれば，この蔡によって書かれた北米におけるハイクを簡潔に紹介した記事が，戦後中国で初めてハイクが中国人自身によって国内に紹介された文章とされる[49]。同文章では，ラムによるハイク６句が中国語訳されて（英語の原文はなし）が掲載されていた。

その蔡の記事に遅れて１カ月後である1987年３月には，中国の雑誌『詩刊』にもラムのハイクの中国語訳が掲載された[50]。この紹介記事（原題：「英文俳句十首」）を投稿した訳者は，かつて北京師範大学で英文学を専攻していた大学院生で，交換制度を利用してイギリスのニューカッスル大学に在籍し，後に同大学の教員となってイギリスに定住した李嵬であった[51]。実は，彼も『英語世界』に掲載された文章をきっかけとしてラムと文通していた人物であり，この同時期における中国でのハイク紹介の動きには，外部からは見えることのないラムと中国人読者の水面下で構築されていたつながりが重要な役割を果たしていたのであった。

蔡暁明は『上海文芸』に掲載された自身の記事の切り抜きをラムに送り，その記事を受け取ったラムは興奮気味に蔡への返信を送ったが，その文面は彼女の喜びが十分に伝わってくる内容であった。

続けて，蔡暁明は1987年11月に発行された雑誌『英語輔導』第４号誌上においても，上述のラムのハイクに１句加えたものを翻訳・紹介していた（原題：「英俳七首」）。英語教学に携わる読者が想定される雑誌であることから，同文章では英語と中国語の対訳で，ハイクで使用されている英単語が句のなかでいかなる意味を持つのかについて詳細な紹介がなされていた。そこで掲載されていたのは，例えば次のようなハイクであった。

古いアルバム
　一瞬わからなかった
　　私自身の若い顔
the old album
　not recognizing at first
　　my own young face
相冊已旧破
　竟然一時認不出　　年青時的我
マキバドリ
　フェンスの支柱を押さえつけている
　　歌声で
the meadowlark
　holding down the fencepost
　　with song
牧場的雲雀
　用歌声
　　攫住籬笆的樹椿

前者のハイクの中国語訳については，アルバムの古さ〈旧破〉がより強調され，原文にある「顔」の語が省かれているが，特に原文との相違はないといえる。一方，後者の中国語訳については，アメリカ原産のマキバドリが，牧場の〈的〉ヒバリ〈雲雀〉（*skylark*）とされ，フェンスは中国式の〈籬笆〉が用いられているが，この微妙な相違は，まさしくアメリカと中国の文化上の差異に起因して生まれた“訳出のズレ”の好例であったといえよう。

以上のように，ラムの訳を初めて中国で紹介した経緯もあり，２人の交流は良好な関係として続いていた。だが，1987年11月12日付けの手紙で，蔡暁明はラムに対して自身の将来に対する不安を次のように吐露していた。

> 私は来年夏に大学院を修了します。大学は私に残って学部生を教えてほしいといいますが，私は自身の将来に対してとても不安を感じています。私の多くの同級生は，進学のためにアメリカに行ってしまいました。私もそうしたチャンスが欲しいのです。そう考えた私は，アメリカの大学に手紙を書き，入学願書を請求しました。しかし，外国人が受験するにあたり，条件としてGREとTOEFLをパスしておかなければならないのです[52]。

このように述べた蔡暁明は，続く文章で，ラムに対してアメリカ留学のための統一試験であるGREとTOEFLの受験費用68米ドルの送金を求めたのであった。だが，この蔡による要望に対して，ラムは1988年2月13日付けの手紙で，仮に今回一時的な支援をしてテストに合格してもアメリカ滞在にかかわるスポンサーの問題などもあることや，ラムも夫も学術的なコネクションがあるわけでもなく，退職後の蓄えもさほどないことから，「あなたのアメリカ進学のための手助けは困難」であることを明確に告げていた[53]。そのラムの返事以降，蔡からの手紙は途絶えたのであった。

アメリカ留学という夢を実現させるため，蔡暁明はラムに支援を求めたのであったが，このやり取りの後，２人の交流は途切れることとなった。両国間の圧倒的な経

済格差の前で，常に支援を求められる側に立たされたラムにとって，やはりこうした謝絶の反復は相当な心理的負担となったはずであろう。

しかしながら，蔡の場合は，彼が非常に遠慮深い性格の持ち主であった点において，他の少なからぬ読者とはだいぶ異なっていたことについても留意すべき必要があると思われる。蔡暁明は当初において，ラムからの小包が不達となっていることを知らせる手紙と，続いてその小包が見つかり，ラムから俳句関連の書籍をようやく手にした際のお礼の手紙の２度にわたり，蔡がすでに「ご多忙のなかあなたの時間を無駄にし」て「迷惑をかけすぎて」いること，「アメリカ人は働き者で寛容であり」このような親切を惜しまないとはいえ，郵送代はとても費用がかかるため，もう関連資料を送らないでほしいと実に謙虚な態度で繰り返し伝えていた[54]。

ラムのハイクを最初に翻訳した功績を残した蔡暁明であったが，彼のこうした性格に鑑みれば，この時点での交流の断絶は，ラムに対して行った要望に対して，むしろ彼が自身に対して感じた慙愧と恥辱ゆえの行動でもあったのかもしれない。

Ⅵ．英語教師・龔海平――『エリザベス・ラムの光』（1993年）の出版

龔海平はラムと交流のあった中国人読者のなかでも，ラムの関心を最もひきつけ，彼女と最も長く，かつ濃密な付き合いを続けた人物であった[55]。「アメリカ文学研究センター」[56]勤務を自称していた彼の素顔は，江蘇省高郵県で高校の英語教師を務める1964年生まれの24歳の青年であった[57]。彼も蔡暁明のように，自身が詠んだハイクをラムに送ることはなかったが，他のハイク詩人との交流を望み，精力的に交流を図ろうとする龔海平に対し，ラムは交流の機会を積極的に提供していた。そうした文通相手の一人として，彼がラムによる紹介を受けて親交を持つようになったのが，ラムが絶大な信頼を寄せる親友，トム・ノイスであった。

トム・ノイスは，本来の名前をハンフリー・ノイス（Humphrey S. Noyes）といい，精神科医を退職後にギリシャ在住していたアメリカ人であった[58]。ノイスは龔海平に自身の句集を郵送し，龔はそのノイスの俳句をいたく気に入ったようであった。そして，ノイスが龔に送付した２冊の句集を他の俳句と一緒にまとめて中国語に訳し，ノイスのアドバイスにしたがい，『瞬間の贈り物〈瞬間的礼物〉』（*The Moment's Gift*）というタイトルを付けて中国で出版することをラムに伝えたのであった[59]。

ノイスのハイクを中国語訳するという龔の考えは，ラムにあてた２度目の手紙ですでに伝えられていたのであったが，ラムもそうした親友の「海外進出」の可能性に若干嫉妬したのであろうか。1988年９月６日付けの手紙で，ラムは龔海平に対して，自身の俳句も中国語訳してほしいという希望をさりげなく手紙のなかで次のように記していたのであった。

> あまり先にならないうちに，私の大きめのチャップ・ブック［引用者注：句集］を送りたいと思っています。また，他にも小さめのものが新たに２冊刊行される予定です。もしかすると，これらの私の俳句のなかからあなたが翻訳したいと思うものがあるかもしれませんね――これまでの中国では見られることのなかったような俳句を[60]。

このラムのメッセージに対して，龔海平は1988年10月22日付けの手紙で，ラムに自身の著作を郵送してくれることへの謝意に加え，これまで中国にはいまだに日本の俳人による俳句を漢訳した１冊しか存在していないことから[61]，ラムの作品が届いた際には，「努力してそれを勉強したいと思うと同時に，われわれの人民に対して紹介できるようにしたいと思います」と前向きな返事を送っていた[62]。

日本語を解さないものの，英語教師である龔海平は，英語によるハイクを手段として俳句と日本文化，ならびにハイクの基盤にあるアメリカ文化の双方を理解しようとしていた。そもそも，龔海平は，この中国におけるハイク紹介の意義と責務について，ラムに対して次のように述べていた。

> 冰心という有名な中国の作家は，俳句を書いたことがあります。何人かの中国の作家は俳句を中国語に訳したこともあります。ですが，彼らは中国の人々に対して，どのように俳句を理解し，どのように俳句を楽しみ，俳句を書くために何を学ぶべきかを伝えることには一人として成功しなかったのです。これらの重要な仕事はわれわれの肩にかかっているのは明らかです。われわれがやるべき仕事は多くあるのです[63]。

龔海平はハイクを深く愉しみ，その価値を中国人が正しく理解してほしいという強い願いを抱いていたようであった。彼は，ハイクを個人で鑑賞するだけに終わらせず，あくまで広く大衆的な理解へとつなげ，普及させていくべきという信念を有していたようにみえた。彼のそうした姿勢は，他の中国人文通者とは明らかに一線を画していた。

例えば，先述したように，蔡暁明は1987年の『英語輔導』第４号にラムによるハイクの翻訳を掲載していたのであったが，龔海平はそのなかに誤訳があるとし，誤訳を防ぐためにも「文化的違いを説明する解説」を書き添える

ことがいかに大事であるか，その重要性をラムに力強く説くのであった[64]。その後のラムからの返信は，蔡の理解が必ずしも誤訳とはいえないことや，龔による理解も理にかなう部分があることを丁寧に説明するものであったが，こうしたやり取りは，龔のみせる異文化理解に対するストイックなまでの姿勢を映し出すものであった。

この時期，中国は新たな変革を求める大きなうねりのなかにあった。1989年に入ってラムに送られた龔海平の手紙は，中国で社会状況が不安定となっていることを伝えてはいたものの，その記述は「現在のわが国の状況についてはあなたも知っているでしょう。天津も含め，ストライキが各所で見受けられます」という，あくまで簡単な説明に終わっていた[65]。その手紙の日付は1989年５月30日であったが，天安門事件（６月４日）は，まさにその直後に発生をみたのであった。

そこから２年後の1991年，龔海平によるノイスのハイクの訳書は，78頁の訳書としてようやく出版された。『瞬間の贈り物―英語俳句選訳』[66]と題して天津の百花文芸出版社から刊行された同書は，ラムの文章が1985年に掲載されてから約５年後のことであったが，雑誌記事にとどまらず，書籍という具体的な成果として世に出された同訳書は，中国におけるハイク紹介によってもたらされた初めての本格的な果実であったといえよう。

だが，同書の出版も，本来は1989年春には完了しているはずのプロジェクトであった。そしてまた，その1989年の時点ですでに龔海平からは，ラムを喜ばせる新たなニュースが伝えられていたのであった。

> そして，次にあなたに伝えなければいけないことは，別の文芸出版社が，あなたの句集を出版したいという希望を伝えてくれている，ということです。もし異論がなければ，あなたの句集の翻訳本を『エリザベスの俳句選訳』としたいと思います。あなたはとっても有名な俳人ですよ！（ハハ！俳人という単語はあなたから学んだんですよ！）[67]

ただ，出版に関しては問題がなかったわけではなかった。それはやはり出版費用をどこから拠出するかという問題であった。龔海平はラムに出版のための支援を求め，ラムはその要請に対して，悩み躊躇しながらも，最終的には応じたのであった。

1992年７月28日にラムは龔海平からの日付の記載のない手紙を受け取った。そこには，ラムから送金された700ドルの到着を確認したものの，規定により実際に受け取ることができるまでにしばらく時間を要することが書かれてあった[68]。その間，夫のブルースと1992年12月24日に死別したラムは単身での生活を送るようになっていた。

1993年２月20日の日付で書かれ，江蘇省高郵から龔が最後に出した手紙がラムの元に届いた後，彼からの手紙は９カ月間届くことはなかった。手紙の不達は続いたが，しかしながら，1993年11月には，同月５日付けの龔海平の手紙が早くも同月26日にラムの元に届くことになる[69]。

手紙は，龔海平が経済特区に指定された広東省深圳市で，龍華教育研究室という英語教育機関に研究員として採用されたため深圳に転居したこと，ラムの中国における俳句集が，龔海平訳により81頁からなる『エリザベス・ラムの光――アメリカ俳句100句』[70]と題した一冊として完成し，1993年10月に香港の文苑出版社から刊行されたことを伝えるものであった[71]。

龔は同書10冊を謹呈用としてラムあてに郵送したことを手紙で伝えたものの，それらは結局ラムの元には届くことはなかった。一向に手元に届かない状況に対して懐疑的になったラムは，龔に書籍の不達を問う手紙を送っている[72]。その手紙は無事に届き，龔はラムに対して，職場の同僚である外国人専門家が間近に渡米予定であることから，彼に書籍を託し，アメリカ入国後に現地から郵送してもらう手はずを整えたことを告げた[73]。

1994年11月７日，ラムは龔海平への手紙で，訳書が11月２日に無事に到着したこと，現物が想像以上に美しい仕上がりであること，龔の父親によって揮毫された表紙タイトルの毛筆が素晴らしいことなどを伝えていた[74]。

ラムはかつて７年間務めた『フロッグポンド』の編集業務を1994年にいったん再開してはいたものの，同年末には辞することを決め，自宅も手放し，単身用の住居に転居した。その後，2005年にラムは他界している。

ラムの文章を発端とした中国におけるハイク紹介は，言語の問題もあり，北米のような“ハイク・ムーブメント”までにはいたらなかった。それでも，人生の終盤に差し掛かっていたときであったからこそ，龔海平によるラムのハイクの中国語訳句集の出版は，ラムの感性が国境をこえて共感を呼び続けることを改めて示した点において，彼女に大きな喜びを与えるものとなったはずであろう。

むすびにかえて

ラムが雑誌『英語世界』に寄稿し，戦後中国で初となるハイクに関する文章が発表されたのは1985年のことであった。その約８年後，龔海平によって中国語に翻訳・刊行された彼女の句集は，1979年の米中国交樹立後から数えて約15年間の民間交流の一つのささやかな成果と呼べるものであった。この点について，龔海平は次のように回顧している。

> 30年前，偶然の機会により私はアメリカの俳句詩人であるエリザベス・ラム女史の作品と出会い，アメ

リカ俳句への理解を深めることができました。欧米における俳句の流行と発展をより理解するためにも，私は日本の俳句を学ぶようになりました。（略）

その後，私はハイクを翻訳し，中国で出版しました。確かに，これは中国の読者が日本の俳句の世界的発展を理解するために役立ったといえます。翻訳と出版によって，私は中国における俳句の創作と俳句研究の発展を促進させることができると考えたのです！[75]

総じていえば，ラムによる中国でのハイクの紹介は，1970年代の国際関係の変化を受けて1980年代に出現した東西文化交流の一事例であった。だが結局，1980年代以降の中国における俳句は，通常において母語の漢語で詠まれる漢俳を指し，一方のハイクは，ラム自身が称したような“ムーブメント”の域にまで達することはなかった。

しかしながら，ハイクの意義について，龔海平は「ハイクが窓となって日本文化への関心が生まれた点」を強調していた[76]。それは，「欧米人さえも魅了する俳句の普遍性とは何か」という疑問から生まれた関心であった。文化の個別性によって，異なるからこそ興味がかきたてられる一方，文化としての普遍性が見出せるからこそ，その普遍性の確かさを確認する欲望が駆り立てられるということ――龔海平による上述の回顧は，結果として，文化の持つ個別性と普遍性のそうした相互補完的な関係性のあり様が，中国におけるラムによるハイク紹介の一事例にも確実に示されていたという，その意味と意義を示唆するものであったのではないだろうか。

【付記】カリフォルニア州立図書館ハイク・アーカイブの存在については，名桜大学山里勝己学長よりご教示いただいた。また，匿名のレフェリーから大変貴重なご教示を賜った。記して感謝申し上げたい。

注

1　ラムの経歴については，アメリカ俳句協会による次の紹介が参考になる。ラムは名誉キュレーター第１号であった。
http://www.americanhaikuarchives.org/curators/ElizabethSearleLamb.html（2018年12月１日確認）

2　2018年６月末日，中国国家図書館OPACで「俳句」の語で検索をかけると中国語文献として73件がヒットした。それらは，日本の俳句史や俳句にかかわる概説・入門書（17件），日本人による俳句の翻訳（11件），中国人による句集（12件），台湾人による句集および翻訳（５件），大学院生の修士論文などの学位論文（22件）が大半であった。

3　中国では1980年に初めて中国語による漢語／漢字俳句が創作され，2005年には北京で「漢俳学会」が成立している。詳細については，次の文章が参考になる。東聖子「漢俳の動き―2005年３月北京にて「漢俳学会」成立・見聞録」東聖子・藤原マリ子編，前掲書，59-72頁。

4　俳句の国際化（国際HAIKU）に関する書籍に，佐藤和夫の先駆的な業績（『菜の花は移植できるか』桜楓社，1978年，『俳句からHAIKUへ』南雲堂，1987年，『海を越えた俳句』丸善ライブラリー，1991年）のほか，次のようなものがある。星野慎一『俳句の国際性―なぜ俳句は世界的に愛されるようになったのか』博文館新社, 1995年。星野恒彦『俳句とハイクの世界』早稲田大学出版部，2002年。夏石番矢『世界俳句入門』沖積社, 2003年。内田園生『世界に広がる俳句』角川学芸出版，2005年。東聖子・藤原マリ子編『国際歳時記における比較研究―浮遊する四季のことば』笠間書院，2012年。

5　E.S. Lamb Papers, Correspondence: China, Box:219 (Haiku MS219) AHA CSL. 以下，本稿ではBoxまでをESLP, CCと略称し，(Haiku MS219) AHA CSLを省いて記載する。

6　北米で知られる句誌としては，例えば，『フロッグポンド』（アメリカ俳句学会，ニューヨーク州），『ドラゴンフライ』（ウェスタン・ワールド俳句協会，オレゴン州），『モダン・ハイク』（ウィスコンシン州），『ウィンド・チャイムズ』（メリーランド州）などがあげられる。星野慎一，前掲書，239頁。

7　例えば，星野慎一は，アメリカの代表的かつ「もっとも中心的」な句誌が『フロッグポンド』であり，ラムを「彼女は俳句を深く愛し，多数の評論を書いてきたと評している。星野慎一，前掲書，234-235頁。

8　伊麗莎白S. 拉姆（大江訳）「俳句在北米繁栄興盛」（Elizabeth S. Lamb, “Haiku Flourishes in North America”）『英語世界』第４期, 1985年７月, 70-78頁。この「大江」というペンネームによる人物の訳文ではラム＝「拉姆」であるが，別の訳者は「蘭姆」としている。本来は日本語訳の全文掲載を予定していたが，『英語世界』雑誌の返信を得ることができなかった。

9　俳句への関心の高まりには，バジルホール・チェンバレン，ラフカディオ・ハーン，ヨネ・ノグチなどが大きな役割を果たし，他方，1910年から1920年にかけてイマジストと称されるイギリス・アメリカの詩人による俳句の“発見”と創作（例えば，エズ

ラ・パウンドの二行詩「地下鉄駅で（In a Station of the Metro)」）も重要であった。同上，70頁。

10 同上，70-72頁。

11 同誌はハイクの初めての専門誌であり，５年間（年２回刊行）にわたって存続した。同誌の発刊によって，アメリカとカナダに居住する詩人は相互に交流が可能となった。同上，72頁。

12 『俳句』（Haiku）は，最初の５年間はトロント在住のエリック・アマンによって編集・発行され，その後の数年間はニュージャージー州在住のウィリアム・J・ヒギンソンが交代した。同上。

13 アメリカ俳句協会は，ヘンダーソンとニューヨーク・ジャパン・ソサエティ（Japan Society of New York）の支援を受けて設立された。同協会は，ヨーロッパ，日本やオーストラリアに多くの会員を擁するまでに成長した。その後，「西洋俳句協会」（Western World Haiku Society），「カナダ俳句協会」（Haiku Society of Canada），「アメリカ・カナダ有季定型俳句協会」（Yuki Teikei Haiku Society of USA and Canada）などの団体も軒並み設立され，数々の俳句大会が開催されるようになった。同上，72-74頁。

14 ハイクの最初のオリジナルなアンソロジーは，1974年のコー・ヴァン・デン・フーヴェル編『ハイク・アンソロジー』（*Haiku Anthology*）であり，1979年にはジョージ・スエード編『カナディアン・ハイク・アンソロジー』（*Canadian Haiku Anthology*）が刊行された。同上，74頁。

15 その他は次の通り。アメリカ：『バーチャル・イメージ』，『レッド・パゴダ』，『ハイク・ザッシ・ゾゥ』（俳句雑誌 象），『アウチ』（かつて日本で刊行）。カナダ：『インクストーン』，『ニュー・シケイダ』。同上。

16 形式として，「通常の三行詩に加えて，一行俳句も広く受け入れられ」ていること，「二行詩は頻繁に見受けられ，具体俳句（コンクリート・ハイク）という実験的な試みも行われている」ことが述べられていた。同上。

17 原文での掲載は８句。同上，74-78頁。

18 ラム→ジェリー・キルブライド（1985年10月30日）。ESLP, CC, Box:219 Folder2. 以下，「→」を，左：手紙の差出人，右：手紙の受取人を示す記号として使用する。

19 ラムによる次の内容のメモによる。「1984年11月27日　ジェリー・キルブライドからの電話。記事について積極的。中国人の友人であるデイビッドが北京の『英語世界』出版社の叔父さんに送ることになっている。」ESLP, CC, Box:219 Folder1.

20 ラム→ジョイス（1985年12月７日）。ESLP, CC, Box:219 Folder2. ラム→ジョージ・スウエード（1985年12月７日）。ESLP, CC, Box:219 Folder2.

21 ラム→チェン・チェンバイ（1986年２月５日）。ESLP, CC, Box:219 Folder8.

22 同上。

23 ラム→ペニー・ハーターとビル・ヒギンソン（1987年４月16日）。ESLP, CC, Box:219 Folder2.

24 陳遠岭→ラム（1985年９月20日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

25 ラム→陳遠岭（1987年１月８日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

26 陳遠岭→ラム（1987年12月５日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

27 ラム→陳遠岭（1988年２月14日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

28 陳遠岭→ラム（1990年２月９日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

29 陳遠岭→ラム（1991年２月11日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

30 陳遠岭→ラム（1991年５月２日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

31 ラム→陳遠岭（1991年５月13日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder9.

32 董継平→ラム（1985年８月13日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

33 ラム→董継平（1985年10月10日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

34 董継平→ラム（1986年８月２日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

35 ラム→董継平（1986年７月16日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

36 董継平→ラム（1986年８月２日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

37 董継平→ラム（1986年５月２日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

38 中国における「ハイク・ムーブメント」の語はラム自身も使用していた表現であった。

39 ラム→董継平（1986年７月16日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

40 董継平→ラム（1986年８月２日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

41 董継平→ラム（日付はないが，封筒の消印は1987年８月31日）。ESLP, CC, Box:219 Folder12.

42 董継平→ラム（1987年１月24日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

43 ラム→董継平（1988年２月11日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder12.

44 蔡暁明→ラム（1985年８月10日）。ESLP, CC, Box:

220 Folder23.

45 ラム→蔡暁明（1985年10月19日）。ESLP, CC, Box: 220 Folder23.

46 蔡暁明→ラム（1986年の年明けに書かれたことは文面に記載はあるが，正確な日付は不詳）。ESLP, CC, Box:220 Folder23.

47 ラム→蔡暁明（1986年７月17日）。ESLP, CC, Box: 220 Folder23.

48 蔡暁明→ラム（1986年12月13日）。ESLP, CC, Box: 220 Folder23.

49 ESLP, CC, Box:221 Folder14.

50 同上。

51 李嵬は1985年８月15日に最初の手紙をラムに送っていたが（イギリスへの渡航は1986年10月），ラムも李の持つ才能を高く評価し，『フロッグポンド』に彼のハイクを掲載し，ラムの友人であるデイビッド・ルクントを紹介するなど，その交友は1990年代にいたるまで長年にわたって続いた。

52 蔡暁明→ラム（1987年11月12日）。ESLP, CC, Box: 220 Folder23.

53 ラム→蔡暁明（1988年２月13日）。ESLP, CC, Box: 220 Folder23.

54 蔡暁明→ラム（1986年８月14日），蔡暁明→ラム（日時は不詳だが，ラムのメモでは1986年11月21日受領との記載あり）。ESLP, CC, Box:220 Folder23. 前者は小包が不達であることを，後者は不達だった小包を受領したことを知らせる内容。

55 そのほかにも，ジュー・ハオ（漢字記載なし）という上海在住の高校生（後に上海戯劇学院に進学，上海崑劇団に劇作家として就職）は1985年８月から1991年12月までの長年にわたってラムとハイク創作による交友を続けていたが，本稿では紙幅の関係上とり上げない。

56 龔海平によれば，これは高郵市の新聞社の中に設けられた研究プロジェクト・グループのようなものであったという。

57 龔海平は揚州師範学院外語系卒業後（1983年），高郵県中学などで高校英語教員（1983－99年），深圳市龍華教研室にて英語教育研究員を兼務（1993－96年）。揚州市広陵区教育局での英語教育研究員，教員養成センター主任，広陵区教育学会副会長（1999－2012年）。江蘇省特級教師認定（2004－05年）。張家港市教育局教学研究室副主任（2012年－）。

58 ノイスの経歴については，AHAの紹介文が参考になる。彼はラムと同じく名誉キュレーター(2007－08年)であった。
http://www.americanhaikuarchives.org/curators/HFNoyes.html（2018年12月１日確認）

59 龔海平→ラム（1988年５月15日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder14.

60 ラム→龔海平（1988年９月６日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder14.

61 この１冊とは，松尾芭蕉他（林林訳）『日本古典俳句選』（長沙：湖南人民出版社，1983年）のことであると思われる。

62 龔海平→ラム（1988年10月22日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder14.

63 龔海平→ラム（1988年３月14日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder14.

64 龔海平→ラム（1990年２月27日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder15.

65 龔海平→ノイス（1989年５月30日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder15.

66 中国語による原題は，『瞬間的礼物―英文俳句選訳』。同書はAHAや中国国家図書館に所蔵されている。

67 龔海平→ラム（1989年５月30日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder15.

68 龔海平→ラム（日付の記載はないが，ラムの元に到着したのが1992年７月28日），ラムから龔海平への手紙。（1992年８月４日），（1992年12月10日）ESLP, CC, Box:219 Folder15. 龔からの返信が長期にわたり途絶えがちであったことから，ラムは彼に対して出版の進捗状況を教えるよう数度にわたり要請していた。

69 ラム→龔海平（1993年11月27日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder15.

70 原題は，『伊麗沙白・蘭姆之光――美国俳句100首』である。ノイスの中国語訳と同様，英語の原文はなく，中国語の訳文のみが掲載されている。この点については，英語と中国語の対訳にした場合，頁数が倍となるため，出版費用の関係上，中国語訳に限って掲載せざるを得なかったという。龔海平氏へのインタビュー。2018年６月30日。

71 香港の出版社であったことの理由について，龔海平は文苑出版社の社長との個人的な関係があったことを述べていた。龔海平氏へのインタビュー。2018年６月30日。

72 ラム→龔海平（1994年１月12日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder15.

73 龔海平→ラム（1994年５月27日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder15.

74 ラム→龔海平（1994年11月７日）。ESLP, CC, Box: 219 Folder15.

75 龔海平「日本国際文化学会全国大会に寄せて」2018年７月２日。同文は，2018年７月７日に開催された

日本国際文化学会第17回全国大会（於：多摩大学）での筆者による発表のために特別に寄せてくれた文章の一部である。龔海平は江蘇省揚州市に在住し，2018年７月の時点における肩書は張家港市教育局教学研究室副主任。

76　龔海平氏へのインタビュー。2018年６月30日。